

1. 明末清初の知識人の対キリスト教観

1) マテオ・リッチ

マテオ・リッチ『天主実義』 基督教の「天主」は「六経（りくけい）」のいう上帝である。

*六経：易、書、詩、春秋、礼、楽。楽を除くと五経

「吾天主乃古経書所称上帝也。『中庸』引孔子曰：郊社之礼、所以言上帝也。朱注曰：不言後土者、省文也。窃意仲尼明一之以不可為二、何独省文乎。・・・」 「歴観古書、而知上帝与天主、特異以名也。」

マテオ・リッチ著、矢沢訳『中国キリスト教布教史』大航海時代叢書、岩波書店

De Christiana expeditione apud sinas suscepta ab Societate Jesu (On the Christian Mission among the Chinese by the Society of Jesus), Augsburg, 1615.

「彼らは孔子を擁護するので、講師の著作の中にある様々な肯定できない内容に対し、私たちに利するような解釈を施すことができた。こうして私たちは儒学者たちの好意を得たのである。」「儒学者たちの最終的な目的は国内の太平と秩序である。彼らはまた家庭の経済的安定とひとりひとりの道徳的修養を望んでいる。彼らの述べる箴言はみな人々がこれらの目的を達成するためのものであり。良心の示すところとキリスト教の真理とに明らかに合致する。」

2) 儒教知識人

・楊光先（1597-1669）に代表される破邪論

楊光先：湯若望、南懷仁ら宣教師が天文台の所長（欽天監）とその助手に抜擢され、西洋暦法、地動説を採用したことをきっかけにキリスト教を攻撃。

リッチの布教方法は一定の成果を得たが、晩年のリッチは周囲の宣教師に、これまで様々な苦勞を重ねてきたが、当然あなた方も今後さらに努力しなくてはならないし、同時に大きな危険にも会うだろう、と述べていた。その危険とは、儒教知識人による反キリスト教言論活動。これが結果的には典礼問題を引き起こすことになる。儒教知識人の中でも楊光先の『闢邪論』『不得已』がよく知られている。

・典礼問題 以下の記述は矢沢利彦「中国キリスト教史」（近藤に基づく）

<端緒>

1633 年、ドミニコ会宣教師来華。ついでフランシスコ会宣教師も中国へ。反適応主義を徹底。中国文化への関心、中国語習得への熱意は少ない。祖先崇拝を禁止。

1637 年、両会の宣教師が追放処分を受けると、これをイエズス会の陰謀とみなし、1643 年、イエズス会をローマの宗裁判所に告発。いったんは教皇の決定により中国人信徒の祖先及び孔子崇拝への参加が禁止されたが、その後イエズス会の反論が受け入れられる。

<発展>

揚光先の迫害（1659）でマカオに監禁されていたドミニコ会宣教師ナバレーテがひそかに脱出、ローマの布教聖省（1622年設立）に提訴。布教聖省は、同省直属の代牧フランス人シャルル・メグロを実態調査に派遣。反典礼の報告書をまとめて（1693年）ローマに送付。

1704年、教皇クレメンス11世は特使トゥルノンを派遣、さらに「天」の語の使用及び孔子・祖先崇拝の**厳禁を教令**として発布。皇帝康熙帝がトゥルノンに3度面会。典礼問題に皇帝が介入する。

1706年、康熙帝、給票勅令を発布。「票」＝皇帝の通行許可証。これを持たないヨーロッパ人は即刻追放されるというもの。これに対抗してトゥルノンは教皇の教令を発表（＝南京教書）。

康熙帝は更に態度を硬化させ、トゥルノンを逮捕、監禁。給票勅令の徹底を図る。イエズス会はこれを歓迎。トゥルノンは1711年死去。

<結末>

1715年、教皇「**エクス・イルラ・ディエ**」（その日から）という大勅書を発布。それまでの教令を強化徹底させたもの。大勅書は1716年中国に到着、中国語に翻訳されたのは1721年。一読した皇帝はキリスト教禁圧を決意する。皇帝は翌年死去するが、その意思は後継者雍正帝によって引継がれ、中国はキリスト教禁教時代を迎える。（完全禁教はアヘン戦争で終了）

2. 清末知識人

キリスト教を受容した知識人：洪秀全、洪仁玕ら太平天国（1853-1864）の領袖+革命派知識人

キリスト教を批判した知識人：洋務派知識人

キリスト教を一定程度認めはするが受容はしなかった知識人：変法派知識人

1) アヘン戦争以降の中国思想の変化

洋務・変法・革命

小野川秀美『清末政治思想研究』初版1960年、増補版1969年（いずれもみすず書房）。現在は平凡社東洋文庫上下（2009年、2010年）で読むことができる。

アヘン戦争（1840年）前後 公羊学派による経世致用の学。

1860年代 洋務 太平天国の鎮圧に功績があった官僚とそのブレーン

1890年代 特に日清戦争の敗北以後 変法 + 革命

2) 太平天国

倉田明子氏の研究を参照してください。もっとも読みやすいのが「はじめての中国キリスト教史」倉田氏担当章

3) 反キリスト教闘争 (教案)

別添資料及び「はじめての中国キリスト教史」第4章を参照。

アヘン戦争から義和団戦争までの間に発生した闘争件数、外交案件になったものだけで400件以上。その大多数が1860年～1900年に集中。

4) 変法派知識人のキリスト教観

・康有為 (1858-1927)

弟子である梁啓超の康有為評

「先生於耶蘇亦獨有所見、以為耶蘇言魂界之事、其円満不如仏、言人世間之事、其精不如孔子。然其所長者、在直接在專純、単標一義、深切著明日人類同胞也、日人類平等也、皆上原於真理、而下切於實用、於救衆生最有効焉。仏氏所謂不二法門也。雖先生布教於中国也、專以孔教、不以仏耶、非有所吐棄、実民俗歴史之關係不得不然也。」

楊克己『民国康長素先生有為梁任公先生啓超師生合譜』台湾商務印書館、1972年、268頁。

康有為も梁啓超も、キリスト教そのものにはほとんど言及していない。

・譚嗣同 (1865-1898)

変法派知識人の中では最もキリスト教の影響を受けた人物といってよい。主著である『仁学』でしばしばイエスと孔子を比較。『仁学』で展開している「エーテル」論もキリスト教の影響を受けたもの。

以下の引用は『仁学』（西順蔵、坂元ひろ子訳注）岩波文庫、1989年。

「・・・孔子、イエスこのかた儒者も牧師も、修学するために必ず学会を起こして多勢が結び合い、時には数千数万の人が朋友として集った。つまり、これがなくては教えもなく学もなく、さらに国もなく人間もない。私が言っている仁もここから出発するほかない。孔子に学んだものは、こうと知っていたから郷里をあとにし、君臣、父子、夫婦、兄弟の人倫をすてさって、孔子について出ていった。・・・イエスに学んだものは、こうと知っていたから郷里をあとにし、君臣、父子、夫婦、兄弟の人倫をすてさって、イエスについて出て行った。徴税人から漁夫まで皆本業をすてて天国の楽しみをともにしたのである。親が死んで葬いに帰ろうとしても、イエスは「死人の葬いは死人にまかせよ」といって許さなかったが、これほどまでに結びつきが強かったのだ。しかしこれらはまだ世間のことである。・・・キリスト教では「敵を見ること友のごとくせよ」と考え（ママ）を明示している。実際民主は天国の趣旨で会って、君と臣は朋友である。兄妹のことは言うまでもない。」 p173-175.

「西洋人は三綱のため愚になっているのに同情して、中国に天の名のもとに治世するようしきりに勧めてくれている。天の下に人を統べ、世間が平等であるならば、一人ひとりが自主の権を保持して、軽重の偏った三綱の弊害が取り除ける、というのだ。ところが、ついでにこっそりと天をイエス教の独占物にし、孔子教に対してはどうも欠落があると批評する。だが、孔子教に（天は）もうそなわっているのだ。」 p176.

孔子廟は利害と欲の場だと思われていると批判し「ところが西洋人のイエス尊崇はというと、どんな学問の成果もイエスのものだとし、病気一つなおっても、金をわずかもうけても、かならずこれはイエスのたまものである、と感謝しさえする。こじつけでもおかげさまなので、それでイエス教はどんどん盛大になっていった。では西洋人はかくも愚劣なのかといえば、教主に仕えるというのは元来こんなもの

であるはずなのだ。」 p 181.

王樹堯『外人與戊戌変法』上海古籍出版社、1998年、109-110頁

「維新知識人のキリスト教に対する態度という点から言えば、成功した面も失敗した面もある。成功した面は、彼らの態度が開放的で、キリスト教に反対はせず、宣教師を対等に遇したことである。他方失敗した面は、彼らが西洋の学問や政治の根本にキリスト教があるとは信じなかったことだ。彼らは宗教が社会や国を救うとは思っていたが、彼らが唱えたのは孔教であってキリスト教ではなかった。」

3. プロテスタント宣教師の知識人観

・ハドソン・テイラー（1832-1905）とティモシー・リチャード（1845-1919）の伝道方法

・孔子かイエスカ／孔子もイエスも

1890年宣教師会議におけるマーティン（米北部長老教会宣教師）の報告：

W.A.P.Martin, the Worship of Ancestors—a Plea for Toleration, *Records of the General Conference of the Protestant Missionaries of China held at Shanghai, May 7-20, 1890, Shanghai, American Mission Press, p619-631.*

祖先祭祀の三つの要素：跪く・敬う・供える

跪く＝尊敬の念を表す

敬う＝拝む行為でも、何かを要求する行為でもない。

供える＝中国の場合食べ物を具えるが、これは西洋人の献花と同じ

こうした主張に対し、保守的な宣教師は強く反発。

・キリスト教による文明化

「文明化の使命」をどうとらえるか。

4. 民国期（1912年～）から今日まで

1910年代後半の新文化運動：「民主と科学」⇒宗教否定

1920年代の反キリスト教運動：知識人によるキリスト教批判、弾劾運動。教育権回収運動。

1922年、中国共産党成立。一方で、孫文も蒋介石もキリスト者。

1949年、日中戦争、国共内戦を経て中華人民共和国成立。→三自愛国運動委員会の設立へ。

1957年、反右派闘争

1966年 文化大革命（～1976年）

1970年代終わり 教会礼拝再開

1980年代 改革開放

1990年代 キリスト教研究活発に。文化クリスチャンの登場

現在 大陸でのキリスト教研究を取り巻く環境の悪化。研究の停滞。